宮古市田鎖車堂前遺跡における居館の構造と機能

福　島　正　和

田鎖車堂前遺跡の堀を有する12世紀代の居館は、遺構の配置やその構造を検討した結果、堀内区、東側堀外区に区分できる。検出遺構や出土遺物等の考古学的検討を経て堀内区は日常の居住域と想定される。一方、東堀外区は東西の２つの区画に区分可能であり、東側堀外区西半の方形区画を馬事関連、東側堀外区東半を武器・武具類を含む鉄製品製作や保守管理の工房域であると推定した。また、この工房域は居館最終段階に祭祀域と姿を変える。これら居館を構成する要素とその推定される機能から、この居館の性格や成立背景を考えることができる。居館の果たした役割として、鉄製の武器・武具製作を担い、馬を飼養・管理した集団を抱えていたものと想定され、居館の主は、地域の軍事的・政治的なリーダーを想定するのが妥当である。

はじめに

宮古市田鎖に所在する田鎖車堂前遺跡では、発掘調査によって12世紀の居館の存在が明らかになった（岩埋文 2020）。これは三陸沿岸地域において、12世紀代の堀を有する居館唯一の発見例であり、宮古地域はもとより三陸沿岸地域の重要拠点の一つであったことは言うまでもない。この調査以前も三陸沿岸地域の各地で12世紀の出土遺物の発見例はわずかながらあったが、具体的な様相を把握するにはあまりにも乏しい状況であった。しかし、田鎖車堂前遺跡の発掘調査は、その暗部に光を当てる成果が認められた。特に居館の発見は、それまで12世紀代の遺構がほとんど認められなかったこの地域では画期的な調査となった。

岩手県を含む北奥において12世紀という100年間は、平泉藤原氏の時代である。この藤原氏四代約100年に及ぶ権勢は北奥全土に少なからず影響をもたらしたとされている。さらに、近年津軽海峡を越えた北海道においてもその影響を示す考古学的な成果が紹介されている（八重樫 2012・2019）。筆者もこれらの研究を踏まえながら、12世紀平泉藤原氏やその一大拠点である平泉と田鎖車堂前遺跡における居館の関係性も朧気ながら指摘してきた。しかし、現状では不明瞭な部分が多いのも事実である。加えて、この居館の全域が調査されていないため情報不足、材料不足の感も否めない。

12世紀代の遺構がみられないこの地域において比較・検討可能な資料も乏しいのも事実であるが、この多種多様な遺構群で構成されるこの居館の構造を整理し、検討することが現段階では肝要であると考えた。これはここ数年のうち、その基礎となるような考察をおこなってきたことで、その思索過程で思い描いたことをさらに統合させたいと考えたからである。居館の構造を考古学的に整理するために必要な情報について、この居館における重要遺構の一つである堀については以前共著論考で一定の基礎固めをおこなった（趙・福島 2021）。また、居館には雑穀用の貯蔵穴が多数伴うことも先の論考で提示したところである（福島 2022a）。特殊な遺物からも居館の機能に関わると考えた（福島 2021）。これらこの居館に関わる近年の論考を土台にしつつ、この居館の遺構群から読み取ることができる居館の構造を分析する。

さらに、この居館の構造分析からその機能を導き出すことで、居館内の構造とその機能分化についても考察し、この地域、この時代に居館が担うことになった様々な役割を具体的に検討することを最終的な目的としたい。将来、この居館以外に同じような遺跡がみられた時には、これと比較・検討する素材になることも念頭に入れ、論を進めたい。

１．居館の立地

居館の構造や機能を考えるためには、その立地も重要なファクターとなる。ここでは居館やこれを取り巻く地理的環境をまとめてみたい。

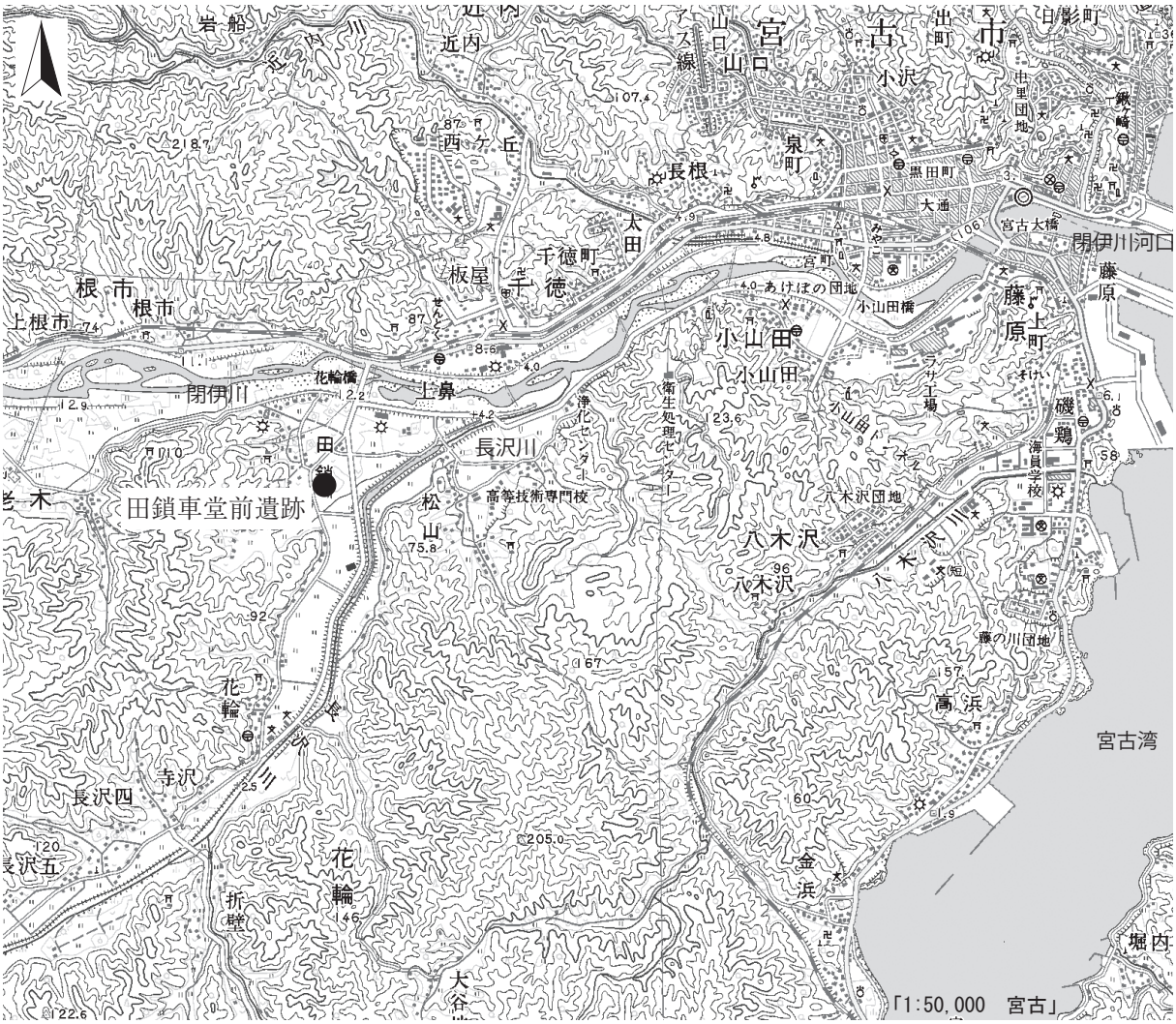
田鎖車堂前遺跡は宮古市田鎖に所在し、小字名の「車堂前」がこの遺跡名の由来である。遺跡の道路を挟んだ南西に「車堂」と呼び習わされる民家が現存しており、その眼前にある土地を指し示し、「車堂前」と称した小字名なのであろう。「車堂」は近世の地名である可能性が高く、県内にも散見される。「車」はおもに水車を表したものと推測されている（註１）。すなわち、この小字名は12世紀代の居館とは、ほぼ関連性のない地名として理解される。

遺跡は標高５～６ｍの比較的広い沖積平野に立地する。「比較的」としたのは、リアス式海岸で有名な三陸沿岸地域は起伏の多い地形であり、広い平野部を多く有していない。この地域では、太平洋に面した湾に注ぎ込む河川の河口部分で平野部が発達しており、このような平野部は現代においても港湾を有する中心市街地となって開発されている。田鎖車堂前遺跡の所在する宮古地域でも、西の北上山地に端を発する閉伊川が宮古湾に注ぎ込み、この地域最大河川の河口付近が現在の宮古市街地となっている。この閉伊川両岸には、これによって開析された狭小なその他の平野部が所々みられ、田鎖車堂前遺跡のある田鎖・花輪地区の平野部もこの閉伊川南岸に当たる。この田鎖・花輪地区の平野部は、閉伊川とそれに合流する支流の長沢川に挟まれている。現在、この合流地点は遺跡よりやや東に位置している。宮古湾から閉伊川を遡って約５km内陸の地点である田鎖地区は、低標高の平野でありながら平成23年３月の東日本大震災で発生した大津波の被害は免れた。しかし、発掘調査中であった平成28年８月末の台風10号等の豪雨では、この地域一帯が冠水するなどの被害があった。豪雨による急激な閉伊川の水位上昇によって、宮古湾で潮の高い時間帯に河口で淡水が吐き出せず、河口付近の平野部で溢れ出るに至った。また、長沢川との合流地点においても同様の現象によって閉伊川に吐き出せない水が合流地点周辺で大量にオーバーフローしたのである。その惨状は今もって忘れられない記憶である。このように支流長沢川の存在が、一定の広さを有する田鎖・花輪地区の平野部を沖積作用によって生み出したものと考えられる。

遺跡の周囲は低湿地に囲まれており、低湿地部分では遺構・遺物が見出せないことから、12世紀当時も特に人工的な機能を加えられた低湿地ではないとみられる。このように調査範囲の東西両端部は低湿地となっており、12世紀の遺構・遺物はこれらに挟まれた東西約250mの範囲の微高地に認められる。低湿地表面の土壌では、時代は不明ながら地下茎や匍匐茎がみられたため、ガマやアシなどの湿生植物が繁茂していたのかもしれない。

田鎖車堂前遺跡の周辺には、同一事業で調査された３遺跡が所在する。田鎖車堂前遺跡から長沢川を挟んで東には丘陵があり、そこに松山館跡が位置する。発掘調査で古代・中世の竪穴住居や工房、鉄生産関連遺構・貯蔵穴群などが調査された。一方、西側には低湿地を挟んで田鎖遺跡があり、さらに丘陵裾から丘陵上にかけては田鎖館跡が位置する。これら２遺跡も発掘調査され、田鎖遺跡では12世紀の遺物がわずかにみられた。田鎖館跡では平安時代前半の竪穴住居・貯蔵穴などが多く検出されているが、１点のみ12世紀の渥美産陶器片が出土している。

さらに、田鎖館跡の調査範囲外の尾根上には、経塚と考えられる川原石を用いた高まりが現存する。田鎖車堂前遺跡の居館からみると、ちょうど真西に位置し、この居館と関連する経塚である可能性が考えられる。ちなみに、この高まりは昭和時代に岩手県教育委員会が実施した「岩手県中世城館跡調査事業」田鎖館（三合並館）の項で「物見壇と考えられる円形の高まりが残されている」とされている（岩手県教委 1986）。現在、この記載された高まりは、図示された位置や記述内容から、その経塚





第１図　田鎖車堂前遺跡の位置

の高まりそのものであると判断できる。このことから居館の西側の丘陵やその裾部分においても関連する12世紀の聖域や宗教施設などが存在した可能性を示唆している。

２．遺構の配置とその構造

ここでは、この居館を構成する遺構群の平面的な配置からその構造についての分析をおこなう。

（１）遺構配置と区域分割

この居館のもっとも特徴的な構造は、堀を有するという点である。堀は２条検出されており、ある時期は、部分的に二重構造であった可能性が考えられる。その他の主要な遺構は、掘立柱建物・竪穴建物などの建物類、井戸、祭祀溝・区画溝・道路側溝などの各種溝、貯蔵穴と推測される土坑類である。これら主要な遺構、特に平面的に区画を有する堀や溝の平面的な配置からこの居館を４区域に区分することができる（第２図）。

二つの堀は西側でのみ二重構造であることが確認されている。確認された２箇所の内堀コーナーには橋が架かっていると想定される。一方は土橋、もう一方は木橋を想定している。

二つの堀で囲まれた空間である「堀内区」は、もっと重要な施設が配置されていることは想像に難くない。それを裏付けるように３棟の掘立柱建物が認められる。

次に、堀の外側である外区のうち東側、長沢川寄りの空間は区画溝１が東西を分割するように南北方向に配されているため、西側の内区に近い方を「外区１」、東側の内区より離れた方を「外区２」と呼称して分割することとした。

外区１には円筒形の土坑群が密集して確認できる。これらは報告書では多く触れることができなかったが、拙稿でその機能・性格について、その案を提示した（福島 2022a）。

外区２には祭祀に関する弧状の溝、これに接続する井戸、竪穴建物が認められる。竪穴建物は調査前の試掘トレンチによって切られていたため不明な点が多いが、中世の竪穴建物に切られていることから12世紀と推測し、今回このエリアの構成遺構として組み入れた。

さらに、明確な遺構は存在していないが、外堀より西側の区域は「外区３」とした。この区域は隣接する田鎖遺跡で12世紀代の遺物がわずかに出土していることを踏まえ、田鎖遺跡も当時の活動領域として「外区３」に含めてもいいかもしれない。ただし、長大な低湿地を挟むため有効な土地利用がおこなわれたかどうかは疑問が残る。

以上、二重の堀・内区・外区１・外区２・外区３の各区域の構造を分析するため、各区域に内包される遺構の様相を概述する。

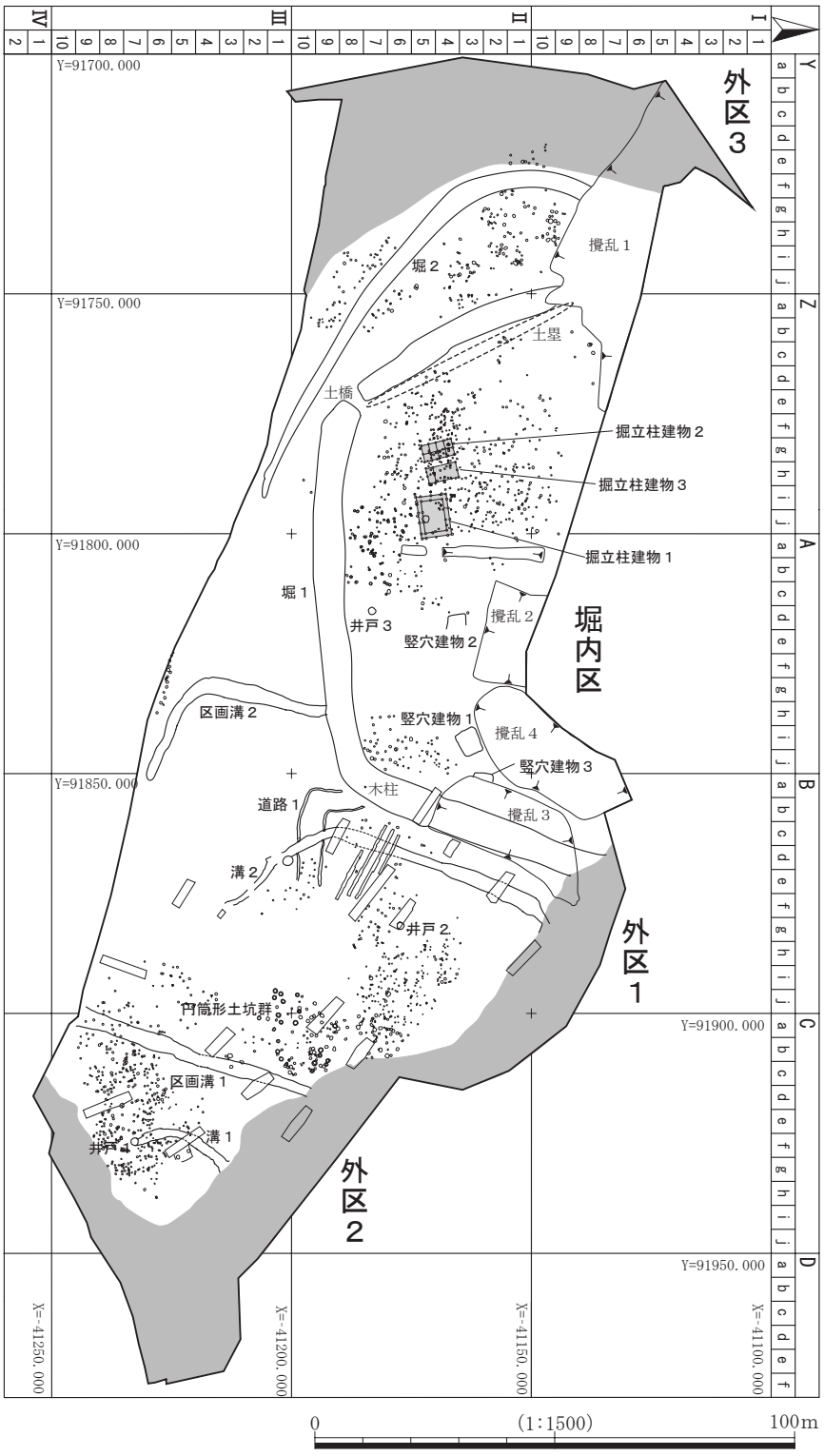
（２）二重の堀

特徴的な二重の堀のうち、堀１は内堀で、それに対して堀２が外堀に相当すると現時点では考えている。堀の堆積状況の分析によって、内堀の先行と外堀の新設、そしてある時期の併存を確認しているため（趙・福島 2021）、西側のみ二重構造になる時期があるものと推測される。

内堀の規模は、総延長約180m、東西長約110m、幅５～８m、深さ約２mである。調査範囲外へさらに延びると考えられ、方形あるいは多角形など全体的な平面形状は不確定であるが、全周する可能性が考えられる。この内堀には、居館西側で改修痕跡が認められる（第４図）。内堀の改修は少なくとも一度おこなわれており、この改修の主要なポイントは内堀西辺ラインの東へのスライド、底面までの深度の増、内区側の土塁の整備である。この内堀が内側へスライドすることは、内堀で囲まれた内区の狭小化に繋がるものと考えられ、内区の様相にも少なからず影響を及ぼしたとみるのが自然である。堀本来の目的が防御であるならば、深さが増すことで防御性を高める働きがある。これは土塁

の整備も同様の効果を生む。

外堀は内堀よりやや浅いが断面逆台形でおおむね内堀と共通する形状である。この外堀は居館成立当初から存在せず、居館の機能途中段階で新設されている。内堀とは異なり、出土遺物がごく少量である。また、土塁崩壊土の流入が認められないため土塁は付属していないものと考えられる。先行してすでに存在していた内堀の改修を契機として、この外堀が新設されたとみられる（趙・福島2021）。この場合、低湿地に大きく掛からないように外堀を配置するために、内堀を内区側へのスライドさせたことと調和的であり、これらが連動している可能性が高い。この外堀は調査区南側際で立ち上がることが確認されている。この立ち上がりについては急傾斜で、この地点で堀そのものが途切れてしまう可能性と、ここに土橋が存在する可能性の両方が考えられる。仮にこれが土橋であったとすれば、内堀の土橋とは直線的な配置ではないため、後世の城館に設けられる虎口のように故意に位置を変えられているのかもしれないが、現段階では不明である。



第２図　田鎖車堂前遺跡遺構配置（12世紀中心）

機能停止後については、土塁崩壊土の有無を除けば内堀と共通する堆積を示しており、最終的には内堀と同時に自然埋没していったものとみられる。その場合、内堀への土塁崩壊土のまとまりは非常に不自然であり、土塁が意図的に破壊されたことが想定できる。つまり、内堀付属の土塁は自然埋没

が進む過程のどこかで損壊され平坦にされた可能性が高い。その時期は不明であるが、最終埋没が中世後半以前であることから、13世紀から15世紀頃までの出来事であったと推定される。

（3）内堀に架かる二つの橋

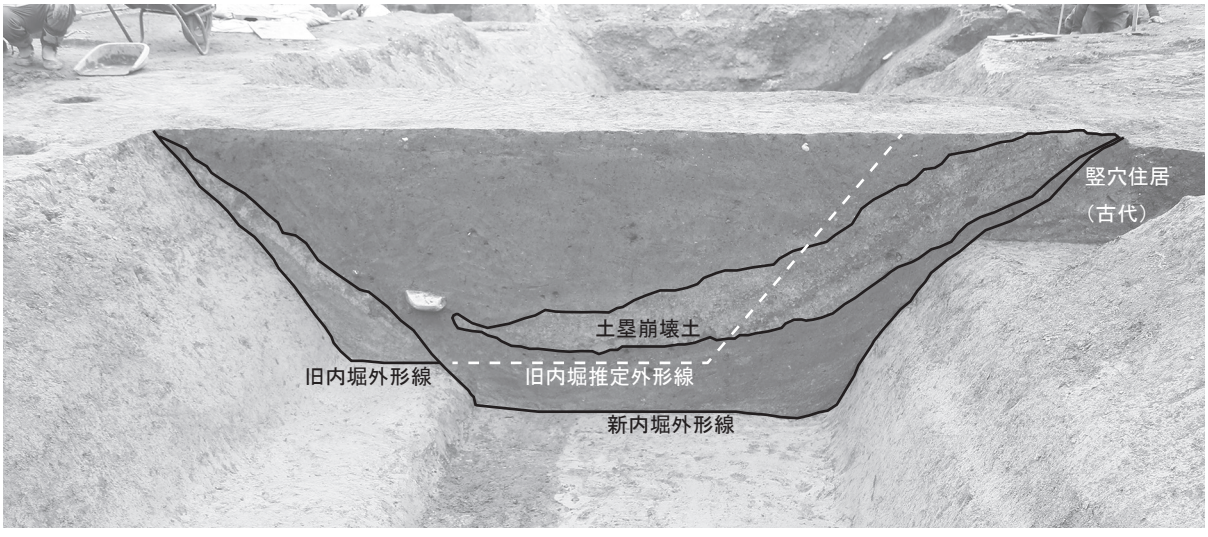
内堀には２箇所橋が存在したものとみられる。内堀南東コーナーでは橋そのものは残存していないが、堀底面で１本の木柱がみられたため木橋の存在を考えている。内堀南西コーナーでは、地山削り残しの土橋が確認されている。

木橋については、当然のことながら橋体そのものが残存していないため、橋の構造は不明である。しかし、打ち込まれていた木柱は橋の橋脚そのものではないにせよ橋を支持する材の一つであったとみられる。土橋とは位置も対照的であるが、構造も異なる点が興味深い。居館機能時に撤去される、あるいは新設されるなど構造上流動的な橋である。外区１にはこの木柱に向かうように小規模な道路側溝が認められ、橋の存在の蓋然性を高めている。

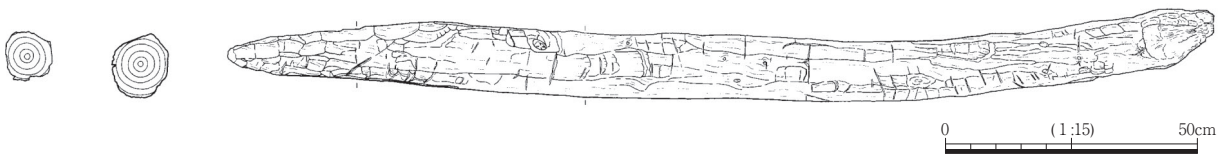
土橋については堀の検討とともに考察をおこなっている（趙・福島 2021）。土橋の平面形態は緩やかな曲線を持つ鼓形であり、それぞれの接続部分が広がる形態である。土橋北側では盛土による補強痕跡がみられた。何らかの原因でこれが崩落した結果、修復がおこなわれている。基部では杭列がみられ、盛土に際しては、杭列を用いた土留め施設が備わっていたことがわかる。この土橋の変遷は、堀・土橋の構築、土橋の拡幅工事、土橋の崩落を経て修復、というプロセスが想定された（第６図）。このような土橋の造作からみて、設計段階からこの出入り口が設定されていた点、補修がおこなわれている点、内区の主要部分に直接通じる点などからみて、居館内区の主たる出入り口だったと判断できる。ただし、付属する門の痕跡は確認されていない。

（4）内区

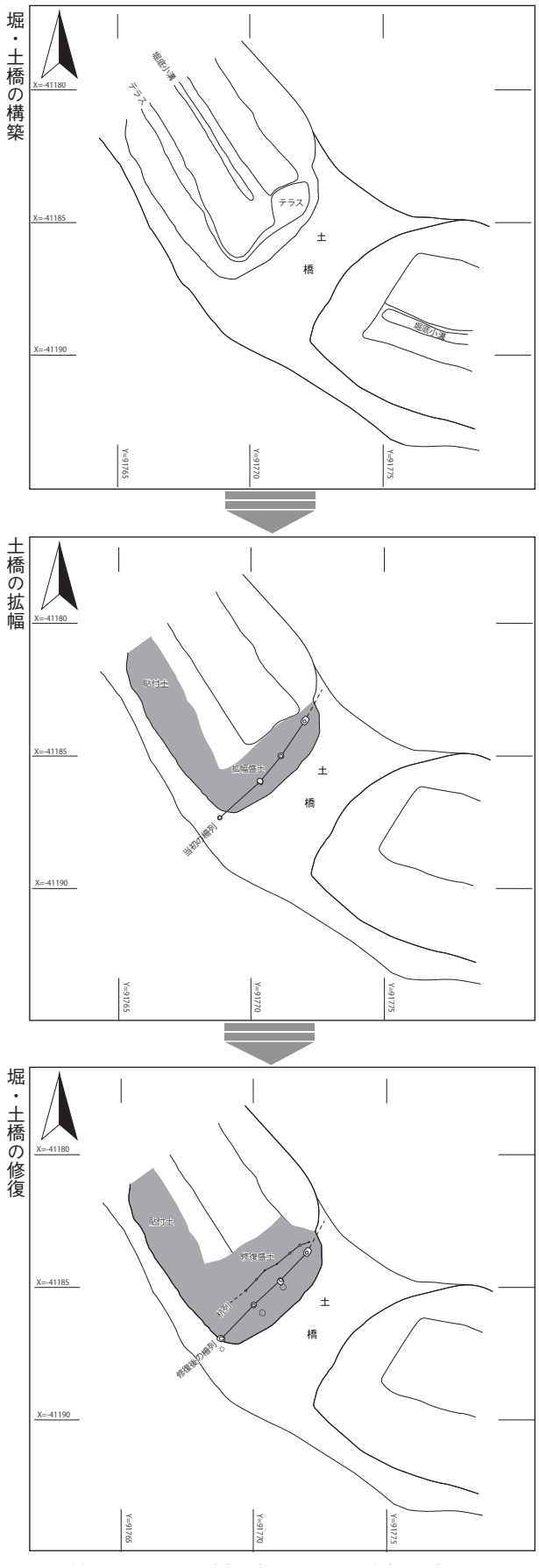
内堀で囲まれた内区は、この居館の核心区域である。内区の遺構は、３棟の掘立柱建物、４棟の竪穴建物、１基の井戸である。



第４図　内堀断面からみた変遷



第５図　内堀（堀１）検出南東隅木柱



第６図　堀１（内堀）における土橋の変遷

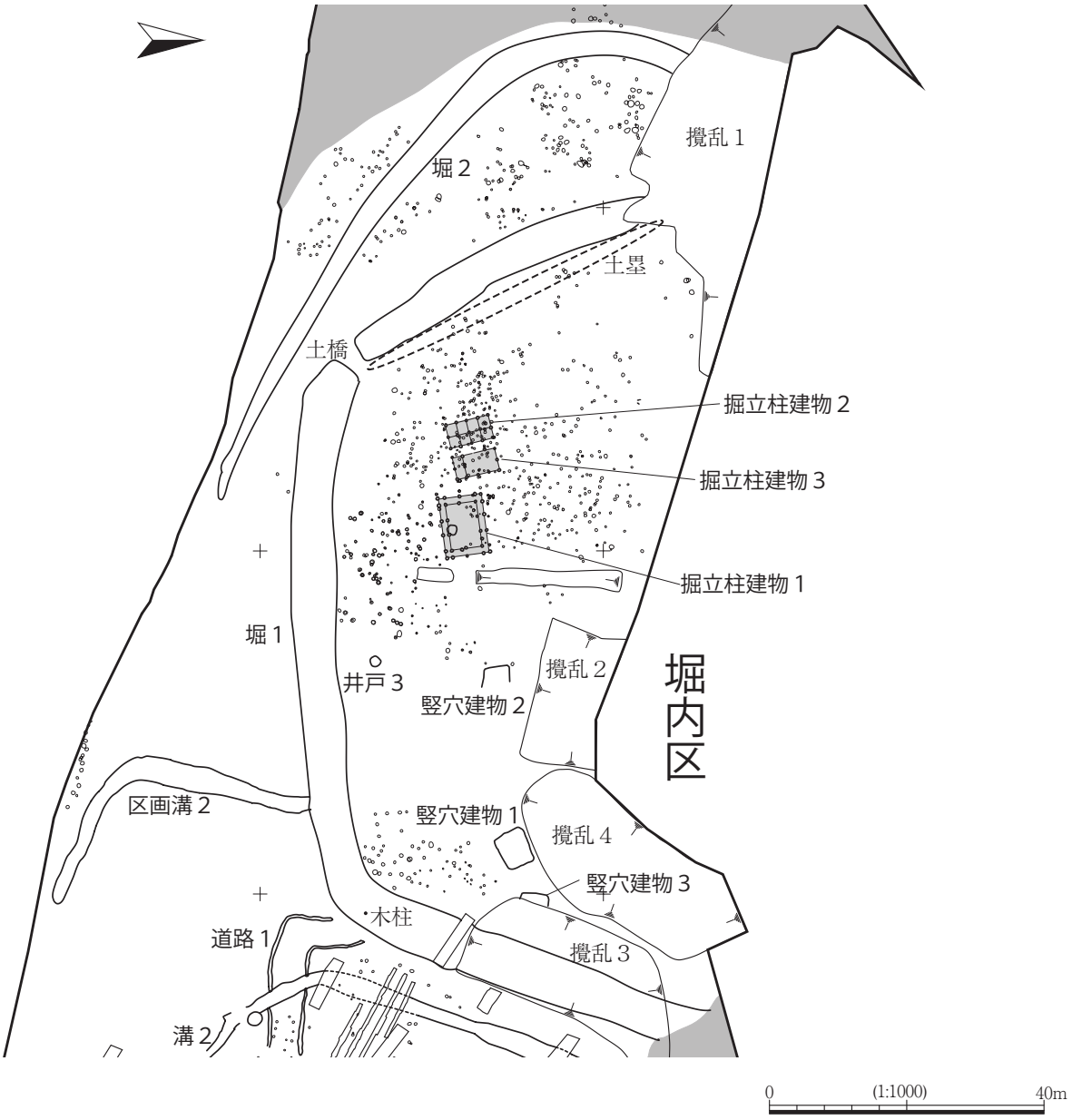
まず、掘立柱建物１は庇が全周する側柱建物である。広義の四面庇付建物である。これは外周の出が半間分のみのためである。本格的な四面庇付建物よりも格式的にやや劣る建物形式であるとみられる。また、配置が主たる出入り口である土橋側に位置している点からも、この居館の主殿ではないと考えられる。主殿は内区にあると考えられるが、調査範囲から外れた内区のどこかの箇所に存在するのかもしれない。

この掘立柱建物１に付属するように２棟のやや小規模な掘立柱建物が認められる。これら２棟はそれぞれ側柱建物と総柱建物という違いはあるが、規模および軸角が一致している。かなり近接して位置していることから、同時併存を考えるのは難しい。そこで規模や軸角の一致を考慮すると、これらが同一機能を有する別時期の建物であったと想定するのが妥当である。そうなれば当然両者は同一機能建物の建て替えであることも必然である。しかし、直接的な切り合いのない２棟であるため新旧を判断するのは難しい。報告書でも記載したが、２棟のうち土塁に近い掘立柱建物２は、内堀の内側への改修に伴って、建物自体も内側へスライドしたと考えられる。内堀の移動と内堀に付随する土塁の整備も相俟って、やはり平面空間の確保が難しくなったことから建て替えとなった可能性を指摘したい。総柱建物の掘立柱建物２から同一機能を有する掘立柱建物３へと変遷したと考える。なお、掘立柱建物１とこれら２棟は併設されていた可能性もある。これら掘立柱建物と内区にある井戸１の存在から日常的な居住が可能であることも容易に想像できる。

竪穴建物は残存状況の良好な竪穴建物１から12世紀の陶磁器類が出土しており、居館内区の施設であったと考えられる。その他の竪穴建物も工房や倉庫など何らかの機能を有して存在したに違いない。

（５）外区１

外区１は内堀の外側で、なおかつ内区寄りの区域である。区画溝１と区画溝２によって区切

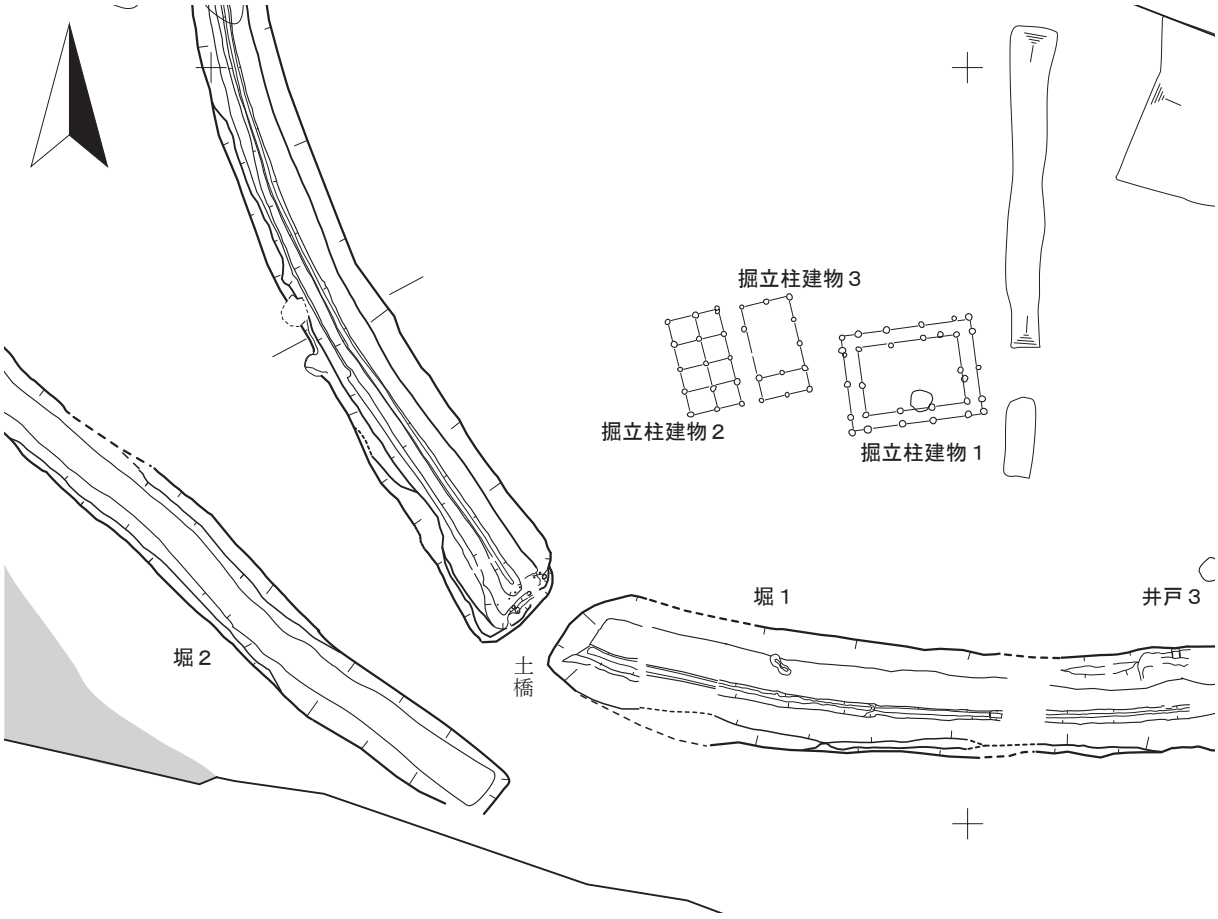


第３図　居館の堀配置および内区平面

られた範囲を一区画であると想定した。いずれの区画溝も出土遺物は少ないが、12世紀の陶磁器片が出土している。これらは矩形あるいは直線的である。区画溝２は調査区外方向へ南延しており、その先で屈曲し、区画溝１の方向へ延びる可能性もある。

この外区１には柱穴は無数に存在したが、中・近世のものも多く含まれており、12世紀代の建物を見出すことはできなかった。また、区画溝２の位置する東側の区域にはこれまた無数の杭の痕跡がみられたが、やはり時期が不明であるのと規則性を見出すことができなかった。何らかの施設や建物が存在した可能性はあるが、実体は不明である。

外区１でもっとも特徴的な遺構は円筒形の土坑群である。広大な調査区内において、他の区域では存在せず、この外区１東側の一角にのみ集中分布する。先述した通り、拙論でその機能を推測し、これらが雑穀の貯蔵穴である可能性を考えた（福島 2022a）。調査時は、トイレ状遺構も視野に入れたが、寄生虫等が検出されず、ごく少量の雑穀（炭化アワ・ヒエ・キビ）が検出された。拙論ではアワが馬



第７図　堀内区３棟の掘立柱建物

匹生産にとって重要な飼料作物である可能性を見出し、この居館の一角に集中するの理由について、馬事関連の空間であったことを考えた。当然、雑穀耕作地があった可能性もあるが、畝間は確認されず、さらに内区により近い区域であることから耕作地である可能性は低いと考えた。

ここでは１基のみ井戸があることも注目に値する。当然馬の飲料水は必要であると考えられ、機能的に合致すると考えた。

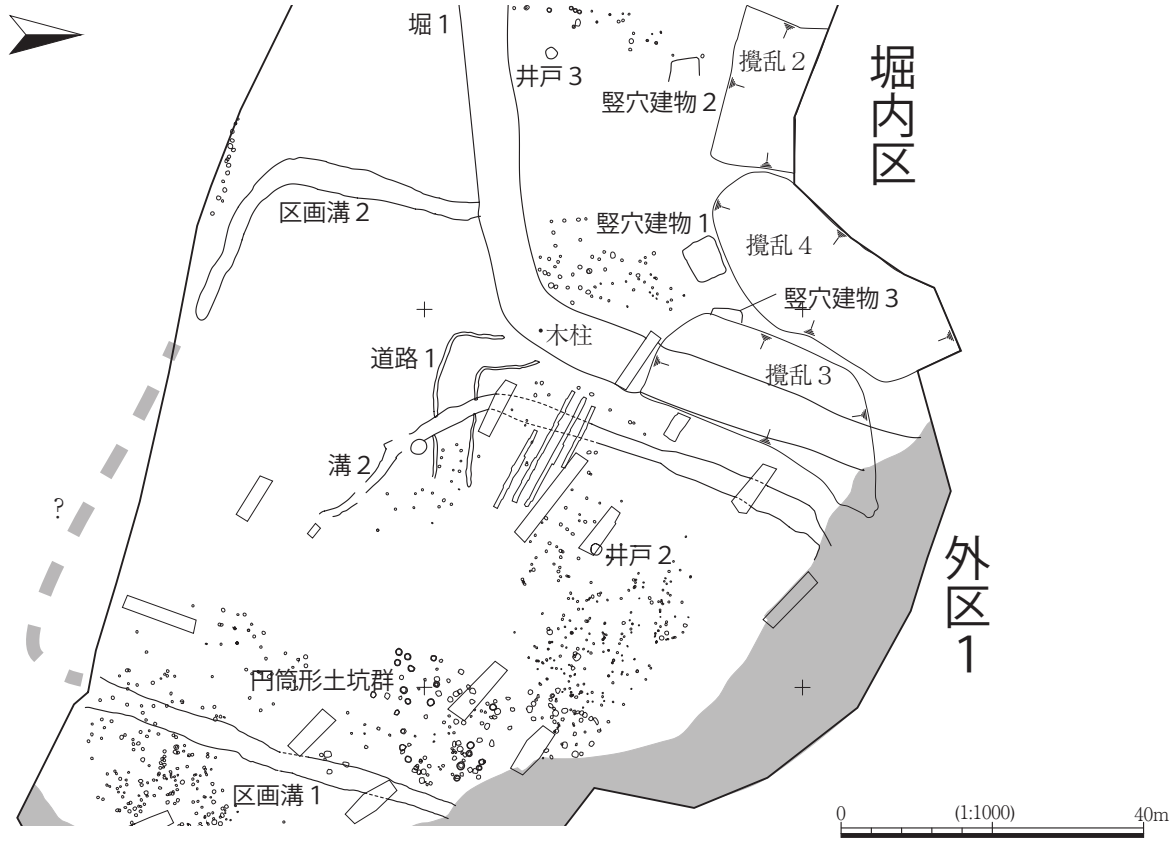
その他の遺構では、溝２の機能が不明である。溝の流末は北側の低湿地に接続することから排水溝の可能性があり、想像の域を出ないが馬のし尿処理用の溝であったかもしれない。

（６）外区２

この区域は、居館東端部、区画溝２より東側の区域である。居館においては、もっとも低い地点に相当する。東側は低湿地になっており、現段階ではここで何らかの機能を見出すのは難しい。

区域内には、竪穴建物１棟、祭祀溝１条、井戸１基などの遺構がみられる。掘立柱建物も存在した可能性もあるが、この区域の柱穴は中世後半・近世のものが大多数を占める。

竪穴建物４は南半が本調査以前の試掘トレンチによって掘削されており、全容不明である。この箇所は祭祀溝も横切っている地点に当たるため、両遺構が切り合って存在している可能性もあったが、今となってはそれを検証できない。この竪穴建物４は方形基調で、床面には周溝が巡っており、板壁だった可能性が考えられる。時期の判明するような出土遺物には恵まれなかったが、張り出しを有する中世の竪穴建物に切られており、これよりは古い時期の建物であること、古代前半の遺構が分布しないエリアに位置すること、内区にある竪穴建物１に形態が似ることから12世紀の建物ではないかと

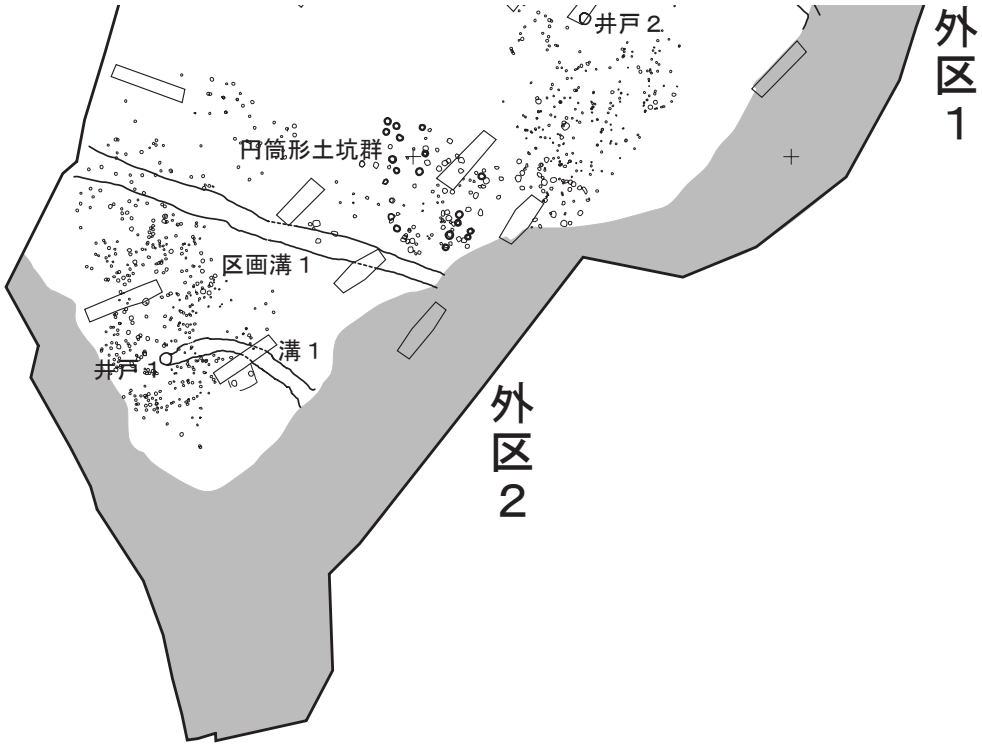


第８図　居館外区１平面

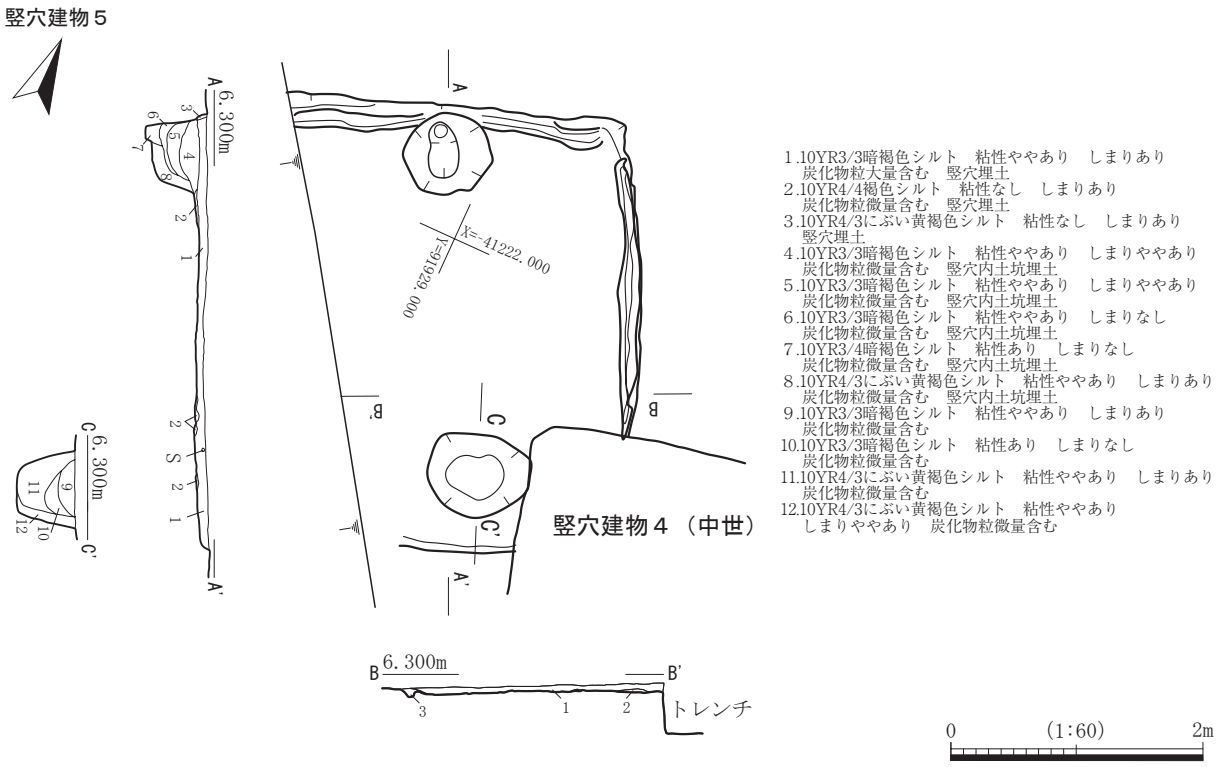
推定した。建物床面の西端と東端には、それぞれ小土坑がみられた。建物の柱穴である可能性も想定したが、埋土中には大量の炭化物や鍛冶滓が詰まっており、これらの廃棄ピットであると特定した。残存する床面で炉は存在しなかったが、建物は鍛冶工房の可能性が高い。炉はトレンチが掘削された箇所にあった可能性が高く、試掘回答にも焼土の記載があった。

次に、祭祀溝はこの遺跡を象徴する遺構である。溝の底面では炭化物層が顕著で、この炭化物層内に多くの鉄製小札が出土した。小札が多く出土した付近の底面には溝底面に２条の石列があり、石のない遺跡内で特殊な意図を持って並べられたようである。祭祀溝としたのは、故意に刻みがある小札、故意に折り曲げられた小札、高台の打ち欠かれた白磁碗など損壊行為が顕著であったためである。小札以外にもこの溝から多くの鉄製品が出土した。また、この溝に接続する井戸１でも、やはり多くの鉄製品が出土した。出土した12世紀の鉄製品の大半がこの両遺構出土である。祭祀溝より出土した小札はその特徴から12世紀前半（津野 2011）、２点の白磁碗のうち１点がやはり12世紀前半代のものであった。もう１点の白磁碗は12世紀後半であったことから、祭祀行為は12世紀後半頃、やや古い器物を集め、その祭祀行為がおこなわれたと推測される。小札はデッドストック品が祭祀に用いられたと想定したが、その他の多種多様な鉄製品もこの付近で製作・修繕されていた、あるいは保管されていた可能性が高い。さらに、これらの遺構内あるいはこの周辺で出土した国産陶器の中には金属による擦痕が明瞭なものも含まれており、これら陶片が砥石の代用として用いられたことが判明した。

調査から推論を交えて考察した結果、この外区２では12世紀後半頃に損壊儀礼の祭祀がおこなわれ、これには祭祀の時期に近い器物のみではなく、古い器物も使われたとみられる。竪穴建物４が鍛冶工房であるならば、この区域は鉄製品を対象とした工房エリアであり、その後何らかの理由で器物損壊



第９図　居館外区２平面



第10図　竪穴建物５

による祭祀がおこなわれたとみるべきである。

（7）外区３

居館の西で、経塚と考えられる高まりがこの西の尾根上に存在することを考えると、居館と無関係

な区域ではないと考えられる。おそらく近世以降は現在のように南北の道路が通じていたと想定される。その前身となる道があったのかもしれない。土橋のある居館出入り口の位置とも調和的である。

３．機能分化と構造変化

居館は区域が分割でき、なおかつ、それぞれ機能がそれぞれ異なっていることを指摘した。このことから単なる有力者の居住空間としての居館にとどまらず、実に多機能であったことが理解される。

ここでは、各構造の機能を明確にし、さらにその構造変化についての検討を加えることによって居館の消長の中における機能と構造の変遷について考えてみたい。

（１）堀および内区

堀および内堀内区については、居館の中心域であることを述べた。そして、内区にある建物および井戸の存在から館主やその他近習の日常生活がおこなわれたものと考えられる。すなわち、内区は居館の核心的な機能を有することを示唆している。主となる建物が確認されていないため、その政治的な役割については不明な部分が多いものの、堀で囲まれたこの空間が政治的機能を有していたことも想像可能である。この政治的・日常的な空間を囲む堀は、やはり防御性を考慮して設計・設置されたことは明らかである。このことは堀内区が外部勢力によって侵攻・攻略される可能性を示唆している。堀と土塁の根本的な防御機能を物語っており、堀を有する居館の意義を見出すものである。

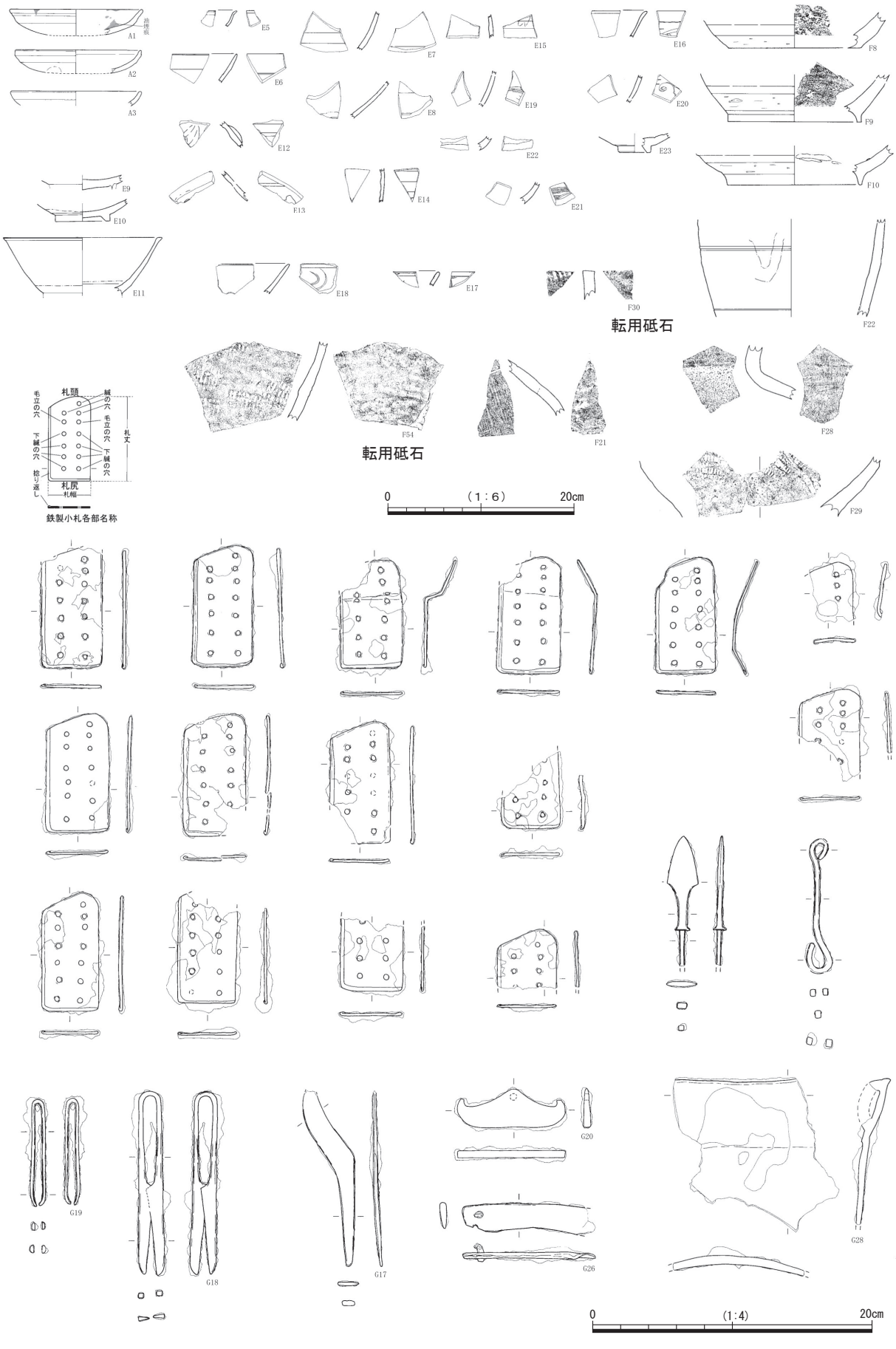
次に、居館の機能中、外堀が新設され土塁が整備される。居館西側が二重の堀を備えるようになる。この大規模な土木工事は、内区の平面的なスペースを制約し、掘立柱建物の建て替えも余儀なくされる。すなわち、居館に何らかの緊張感が走り、防御性を高める必要性に迫られたことが想像できる。土橋の盛土内から劃花文の青磁碗片が１点出土しており、二重堀形態となる時期を前後するタイミングで混入した遺物である。翻って、堀埋土の遺物の中に12世紀前半頃の水沼産陶器片が含まれている（註２）ことを考慮すると、居館は12世紀前半に成立していた可能性がある。その後、12世紀後半頃、二重堀へと構造変化した可能性が考えられる。同時に内区は居館成立当初以降も変わらず核心的な機能を有していたことも想定される。

（２）外区１

区画溝で区画されたこの区域は内区に近い。馬事関連施設を想定した区域である。ここでは遺構・遺物からその構造変化を捉えることができなかったため、現段階では終始単一の機能を有したものと解釈している。これは密集して検出された貯蔵穴の一部に切り合いを有する事例があることから、ある程度の長期間、飼料用雑穀の貯蔵が繰り返されていたと推測される。馬の頭数までは想像もできないが、必要に応じて居館で飼養管理された馬がここに集められていた可能性が考えられる。雑穀を多く与えられているのであれば、駄馬ではなく上馬の可能性が高い。軍事目的かあるいは出荷目的かは不明だが、居館の性格の一つを示すものと考えられる。

（３）外区２

居館最東端に位置するこの区域は、鍛冶工房を備えている鉄製品の製作・加工・修繕を担ったエリアであることを述べた。竪穴建物は鍛冶滓の廃棄坑の存在から鍛冶作業がおこなわれた工房であると想定したが、周辺域の鉄製品の出土量はその他の区域の比ではない程、質・量ともに豊富である。居館出土鉄製品の大半がこの外区２出土である。また、このエリアで出土した陶器片の一部に砥石として転用されたものが存在するため、陶器片による鉄製品の研磨がおこなわれた可能性が高い。鉄製品は、後述する祭祀溝とこれに連結する井戸から多く出土した。出土鉄製品は武器（鉄鏃）・武具（鉄製小札）・馬具（銜）・工具（弓削刀子）等多彩なものであり、何か一種に特化し集中的に製作してい



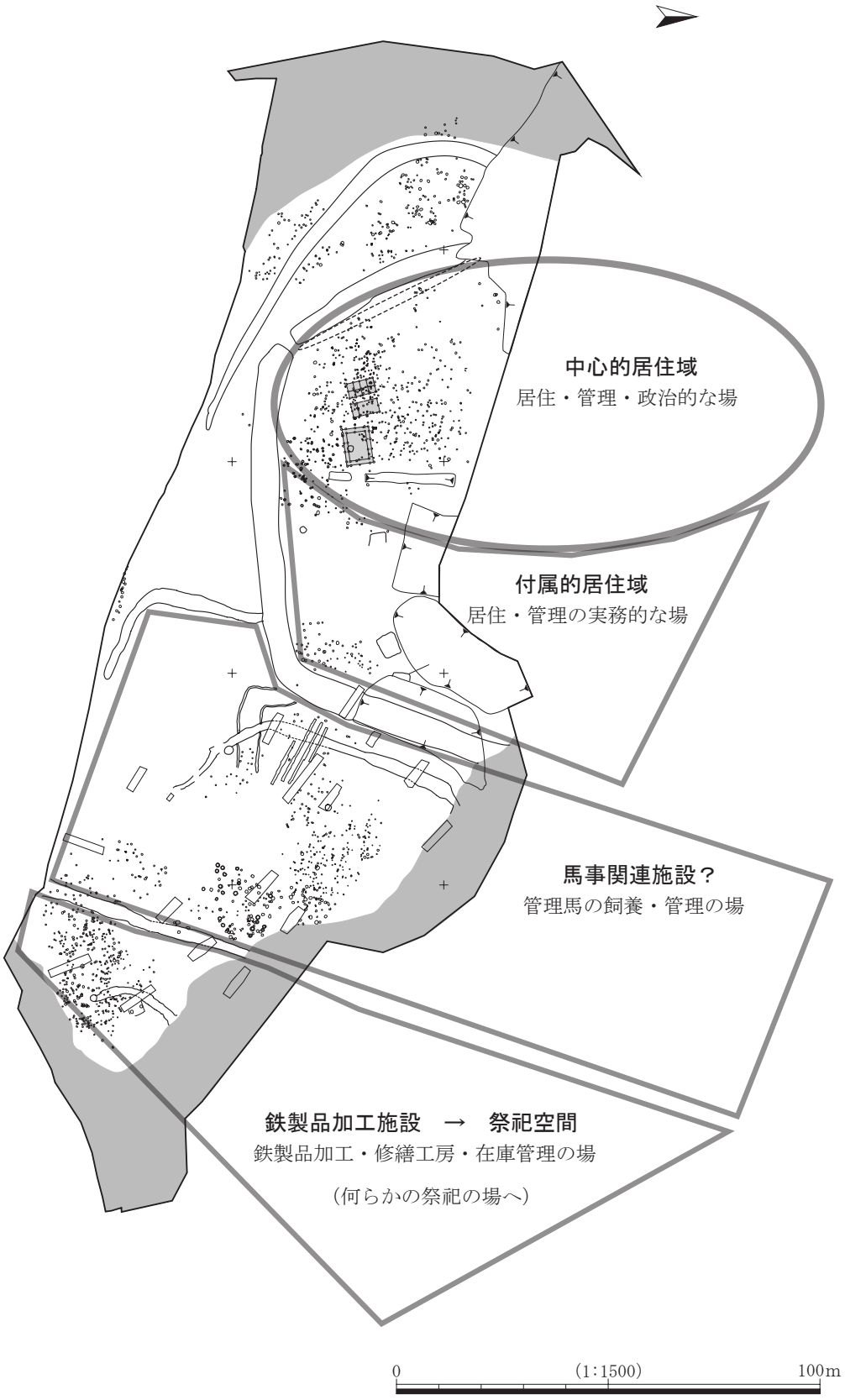
第11図　居館出土主要遺物

た様子は看取されない。したがって、製品の製作というよりも再加工や修繕、それに伴う保管といった役割を果たしたものと推測される。このことは、出土した鉄製小札の観察からも補完される。出土した鉄製小札は、編年を考慮すれば11世紀後半から12世紀前半にかけてのものである（津野 2011）。居館の中心となる時期は、12世紀後半であるためそれよりもやや古い段階の器物である。出土した鉄製小札には、微調整の矯めや漆の塗布が認められないことから、大鎧として組まれた履歴を持たないと報告した（岩埋文 2020）。このことは、この工房区域内でデッドストックされていたリペアパーツの一つであり、余剰の鉄製小札が長らく保管されていた可能性が考えられる。同時に、鉄製小札を縅して大鎧を組み上げる甲冑師のような専門的な職人の存在も示唆している。さらに、出土した弓削刀子が弓師によって弓製作に用いられた工具であると想定した拙論（福島 2021）とも符合し、武器・武具製作の特殊な技能を有する職人が周辺も含め近住していたことを示唆している。その時期は、鉄製小札と共伴する白磁碗のうち、１点は12世紀前半のものがあり、鉄製品以外にも時期的に近い遺物の存在は、12世紀前半頃すでに工房機能や保管機能が始動していた可能性を示している。居館の消長を考えるうえでも重要である。

一方、この区域では最終的に祭祀溝と井戸のセットが機能する段階に至る。先述した鉄製小札および白磁碗は祭祀溝での損壊儀礼によって遺棄されるわけだが、損壊儀礼を伴う祭祀行為はもう１点の白磁碗の時期である12世紀後半をもって完結していると考えるのが妥当である。12世紀前半には操業を開始していた工房域も12世紀後半にその姿を祭祀の場へと変化させるのである。この構造変化が何を意味するのか計り知れないが、想像を含めて述べると、12世紀後半頃に工房の機能停止があり、これまで保持していた鉄製品の放棄がなされた可能性がある。損壊儀礼に込められた願いや精神性の本質は明確ではないが、12世紀前半から保持していた武具、溝の掘削による工房建物の損壊は、やはりこの区域での鉄製品に関する作業の終焉とその区切りを示しているように思える。

さて、この外区２の構造・機能変化は、現段階においては居館中心域の構造変化と連動するかどうかは不明である。しかし、居館中心域での防御機能強化と東側工房域機能停止とは目的という点では相反する事象である。外敵からの脅威を想定した緊張感が走れば、居館内での鉄製品、特に武器・武具の加工や整備も急ピッチで促進されると想定されるが、居館内での鉄製品の整備や保管を放棄する事態になっている。この矛盾の原因を探ると、いくつかの仮説が想定される。その一つは、この東側工房域の機能停止と西側防御機能強化に時間的なズレがあった可能性、もう一つには、東側工房機能を別の場所へ移転・拡充させた可能性などが考えられる。前者の場合は、西側防御機能強化まで東側工房域は機能していた。しかし、その後居館終焉頃を契機として、工房域も機能停止し、その機能停止に伴って祭祀がおこなわれた、と想定することができる。後者に関しては、周辺域での工房の拡充は現段階で確認できない。周辺域を含めた発掘調査成果では、西側に隣接する田鎖遺跡・田鎖館跡では同時期の鉄滓など工房に関連する遺物がみられない。一方、長沢川を挟んで東に位置する松山館跡では、12世紀を前後する時期の竪穴建物（工房か？）が１棟認められるが、居館と併存していたとしても、その機能の拡充を示す程のものではない。したがって、現段階では居館の終焉そのものと溝での損壊儀礼による祭祀行為が関連している可能性を考えたい。

現状では推論にとどまるが、居館はその軍事的緊張感から、おもに西側の防御機能強化が図られ、その後終焉を迎える。その終焉に伴って東端の工房域解体・整理、そしてその終焉に対する器物損壊儀礼の祭祀が執行されたのではないだろうか。このような一連の象徴的な動勢が12世紀後半頃にこの居館で起こったものと推測する。



第12図　居館の構造・機能とその変遷

４．居館の性格とその背景

（１）居館の成立背景

構造や機能からこの居館の性格やその役割が見え隠れする。報告書でも記したとおり、居館の立地から宮古湾を通じて太平洋を利用する水運の拠点として成立した可能性が考えられる。12世紀の宮古湾は、平泉藤原氏の太平洋ルートを利用した交易の最重要寄港地の一つであり、なおかつ、これを管理・監督するための在住する人物および施設が必要となった結果、この宮古湾から閉伊川を遡り、やや奥まった場所に位置する居館の成立を想定した。しかし、それ以外にも重要な要因を付け加えることができる。それは近年の検討によって、12世紀以前から宮古湾周辺では、各種産業が開花している様子がみられる点である（福島 2022a・2022b）。特に、塩と雑穀生産は馬匹生産を支える重要な産業であったことを指摘した。５世紀に列島で始まった馬匹生産は、始発地点である河内平野から東山道を主要なルートとして東進し、岩手県域でも遅くとも８世紀には各地で始まっていたと考えられる。その後、10世紀には宮古湾を中心とする岩手県沿岸地域、岩手県内陸北部、青森県東部地域などで馬匹生産が盛んになることを想定した。また、それ以前からすでに始まっている豊富な砂鉄を始発原料とした鉄生産も同様である。これら産業と居館の成立にも因果関係があると考えられる。

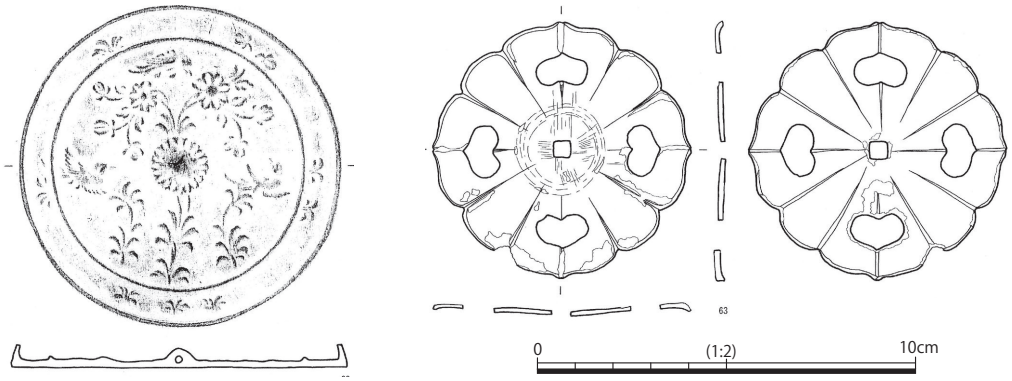
平泉と居館の関係は不明確であるが、現段階では平泉と無関係であることを論ずる方に無理がある。第一に、平泉藤原氏が太平洋の海上交通を掌握しているからこそ、北方交易品が平泉の経済基盤となっているはずである。この掌握手法は必ずしも明確にはなっていないが、少なくとも地理的にみた重要寄港地である宮古湾の寄港や交通の妨げになっては、北方交易に多大な損害が出ることは必至である。日本海ルートも存在するが、平泉に直結する北上川は太平洋にその河口を有している。海上から河川を利用する水運の連続性を重視すれば、太平洋ルートが理にかなうのではないだろうか（註３）。常滑産陶器を有する北海道厚真町の宇隆１遺跡は、その行く先を示しているように思える。

この太平洋の海上交通は、宮古湾周辺地域で得られた生産物を平泉へ供給することもできる。12世紀段階での宮古湾周辺の馬匹生産を直接結びつける史料は存在しないが、田鎖の居館で管理されていた可能性がある馬には、当然軍馬も含まれていると想像される。軍馬、鉄製の武器・武具、これら軍事に関わる生産活動は、いわば軍需産業であり、これを在地社会のみで制御することが可能か、という疑問がある。武家社会において軍需産業の掌握を、軽視することはその体制基盤そのものを危うくする。宮古湾を含め岩手県沿岸地域では11世紀の拠点は未発見であるが、12世紀前半代に成立したこの居館が平泉の経済・軍事等を補佐していたと考えられる。しかし、11世紀段階の安倍氏は、軽視していたわけではないだろうが、結果的にこのような各種産業を掌握しきれていなかった可能性も想定しておいた方がいいかもしれない（註４）。

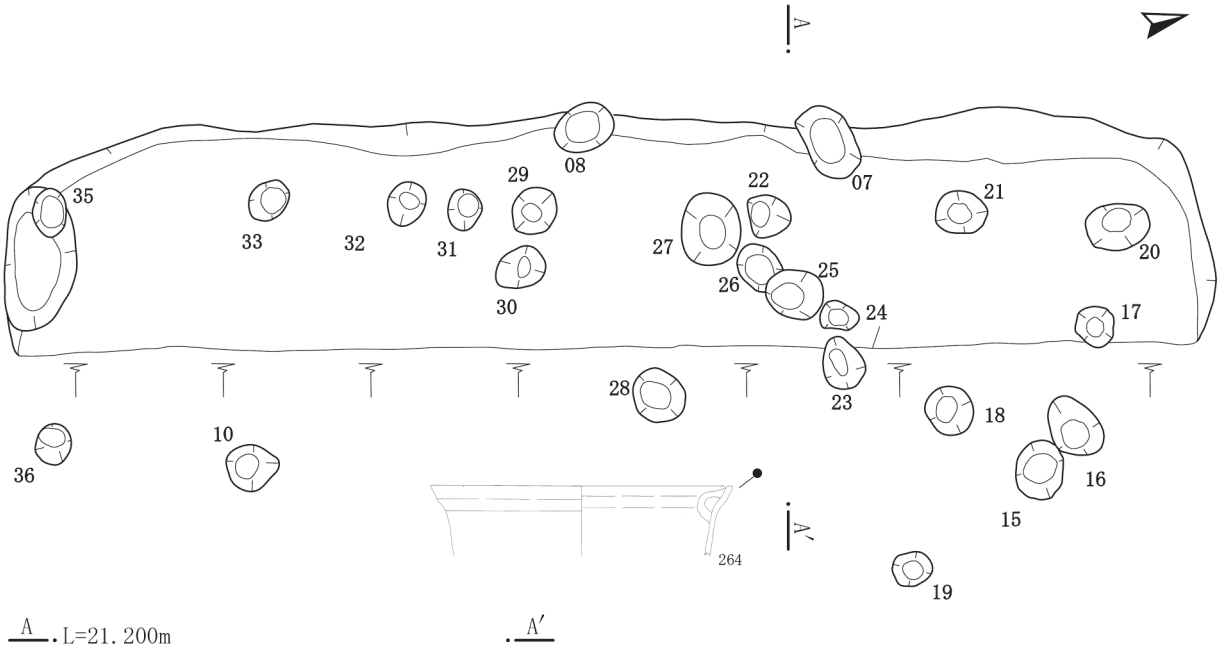
（２）居館と地域社会

居館を取り巻く環境から在地の地域社会との関係性を探ることは重要である。しかし、現状では、岩手県沿岸地域において12世紀の遺構・遺物が限定的であり、これを知るに足る材料に乏しい。特に、重要基盤であったと想定した鉄生産関連遺跡は数多く存在するが、通常土器等の遺物を伴わないため時期を特定するに至らないことが多い。放射性炭素年代測定（AMS）を用いて、この時期問題を解決しようと試みられているが、その精度もまだ不安定であると言わざるを得ない。田鎖車堂前遺跡の測定でも多くの測定結果が考古学的な知見と乖離していた。歴史時代のみならず、弥生土器採取の炭化物でさえ的を射た値ではなかったと記憶している。本題に戻るが、このような状況でも田鎖地区の東に位置する松山地区や八木沢地区で、注目すべき遺物が出土している。

田鎖車堂前遺跡の居館から長沢川を挟んで東側に隣接する松山館跡では、前述したとおり、12世紀



第13図　八木沢駒込Ⅰ遺跡出土鏡と総角金具



第14図　松山館跡工房と出土鉄製品

代の工房と考えられる竪穴建物が鉄製品を伴って検出されている。尾根頂部よりやや下った斜面に立地する竪穴建物は床面の大半が残存していないが、煙道やカマドが認められないため何らかの工房と考えられる。遺跡内では鉄生産関連遺構や関連遺物も多く検出されており、鉄生産に関わる工房の可能性が高い。この工房出土鉄製品のうち、鉄鏃は平安時代のものであると推測される。内耳鉄鍋は下端の湯口は不明ながら、その形態から12世紀頃の所産である（註５）。この遺構以外にも竪穴建物は多くみられるが、12世紀の遺物を伴うものは、この工房のみである。鉄生産関連遺構の中には12世紀代のものも含まれている可能性があるが、現段階では不明である。12世紀の工房が長沢川東岸にあることから、田鎖車堂前遺跡の居館と何らかの関係が考えられる。松山館跡は日常生活の場ではないことは明らかであり、居館の基盤を支える生産域であり、対岸の田鎖車堂前遺跡の居館がこれを統括していたものとみられる。

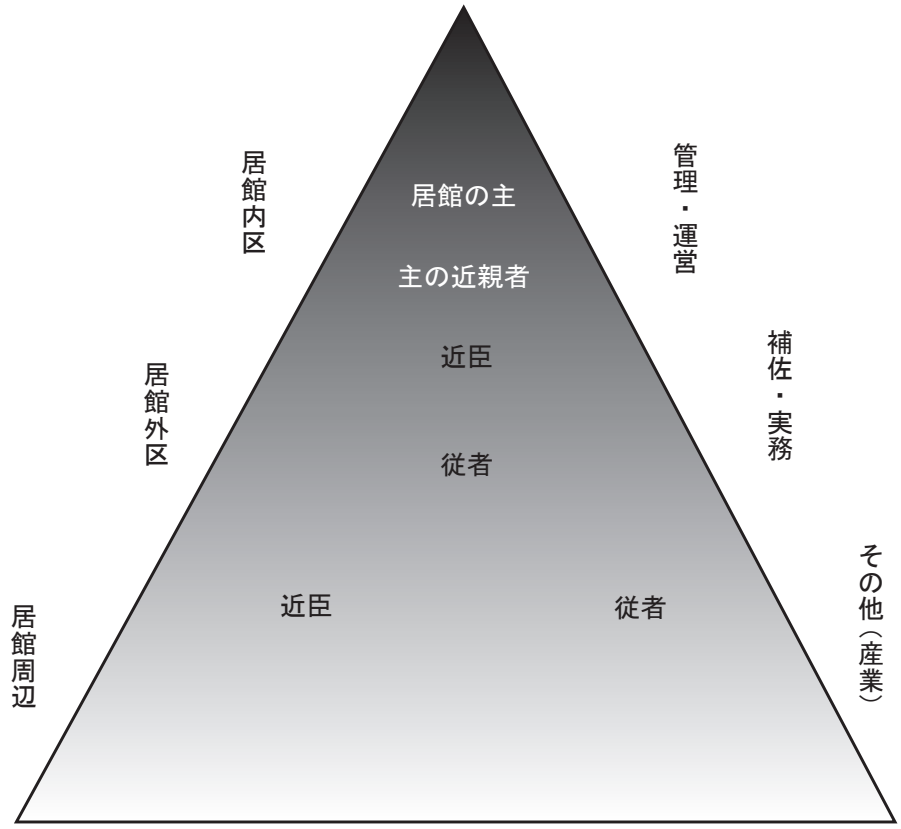
さらに東の八木沢地区では、八木沢駒込Ⅱ遺跡の尾根から延びる斜面で12世紀の銅鏡１点と総角付鐶座金具１点が出土している。銅鏡は「秋草飛鳥文鏡」で12世紀の型式に相当する。鏡に付着した繊維は漆が塗布された絹布であり、丁寧に布に包まれていたのかもしれない。総角付鐶座金具は鍍金されている。大鎧の背面中央を飾る金銅製金具であり、全国的にも出土事例は少ない。大鎧で用いられる部品であり、形態から12世紀中頃のものであるらしい。これも付着物があり、墨痕のある紙であることが判明している。これらは遺構に伴うものではないため、どのような経緯でこの場に所在したのか来歴等不明であるが、尾根頂部突端部で小規模な土坑が１基検出されており、本来これらが埋納された土坑である可能性が考えられる。出土した２点が鏡と武具であること、土坑は尾根頂部突端部に位置することから、想定される遺構は経塚で、これらが副納品の一部であったとするのが妥当であろう。総角付鐶座金具の紙の付着は、丁寧に単独で和紙に包まれていたか、経典が密着していた可能性も考えられる。いずれにせよ、これら２点は祭祀的な意味合いを持ってこの場に持ち込まれたものであることは間違いない。田鎖館跡に所在する経塚との関係性もあるかもしれない。

田鎖車堂前遺跡の南東約３kmに位置する八木沢野来Ⅰ遺跡は、八木沢駒込Ⅱ遺跡の南に隣接する。発掘調査では12世紀の白磁碗片が出土している。遺構に伴わない遺物であるが、遺跡内では工房と考えられる竪穴建物が検出されており、関連性が注目される。この遺跡も鉄生産の場であったとされており、竪穴建物はこれに関わる工房の可能性が考えられる。なお、八木沢駒込Ⅱ遺跡の尾根から下方に当たる地点で白磁碗が出土しているため、八木沢駒込Ⅱ遺跡でみられた鏡などに伴う遺物であった可能性もある。

（３）居館の基盤

これまでみたとおり、田鎖車堂前遺跡の堀を有する居館は、関連すると思われる鉄生産の場が周辺域に認められる。特に、松山地区・八木沢地区は出土遺物等から判断すれば、居館とかなり密接な関係にあったと考えられる。鉄生産という地域の産業が周辺に展開しており、当然これらを統括していたのが居館であったと想定されよう。また、八木沢駒込Ⅱ遺跡でみられたように、祭祀的な遺物の存在はその宗教観や精神性においても居館と共有されていたと想像される。特に、総角付鐶座金具は大鎧の部品であり、居館の祭祀で用いられた大鎧の鉄製小札と相通ずる。共時性のみならず、祭祀的な意味合いを武具に見出すという共通の宗教観に注目すべきである。これら周辺地域には、10世紀後半以降、雑穀や塩生産の痕跡もみられるため、馬匹生産も周辺域でおこなわれていたと推測される。

地域の政治・経済・産業・物流・宗教等を統括・管理するシンボリックな拠点こそが、田鎖車堂前遺跡の居館が担った最大の役割であった。このように複合的な事柄を縦走するように統合・管理するためには政治力が必要と思われ、その執行を居館の主たる人物がおこなっていたと考えられる。



第13図　居館の階層

また、周辺域ではこの居館終焉以降も鉄生産・馬匹生産が継続している可能性が高く、特に馬匹生産は中世文献史料の記述にみられるように本邦随一の生産地として認知されるに至る。これら産業の基盤整備と流通の確立に導いた功績を、この居館という地域のシンボルに当てはめることも可能であると考える。

まとめ

本稿では、田鎖車堂前遺跡の居館について論じた。未解明な部分が多く推論を重ねたが、居館の構造とその機能について考察をいくらか前進させたつもりである。本来であれば、発掘調査報告書に盛り込むべき内容だったかもしれないが、その時点では詳細な分析をおこなう時間も、それを記載する紙幅もなく、結局本稿に至った。

居館の構造分析によって、広義の居館内部が区域分けできることを提示した。各区域はそれぞれ、機能が異なっており、堀内区を中心とする居館は様々な機能を有する複合的な施設であったことを述べた。堀内区は居館主、その近親者に加えて近臣等の日常的な生活・居住空間であると同時に、政治的な核心部分でもあった。堀の外区には馬事関連施設や鉄製品の加工・修繕などの工房域がそれぞれ備わっていたと想定した。居館は12世紀後半に何らかの軍事的脅威に晒され、防御機能が高められ、その後12世紀のうちに終焉を迎えたとみられる。居館の終焉時あるいはその後に工房域の解体・破棄がなされ、これらの有していた器物を損壊して祭祀がおこなわれたと想定した。

また、周辺域では様々な産業が根付いており、これらを統括・管理する役割を居館が担っていたと思われる。特に多くの軍事物資を扱うこの地域が、平泉と無関係であったとは到底考えられない。平

泉の権力基盤の一部を委譲されているため、それなりの人物の支配を考えるのが妥当であろう。

さて、平泉藤原氏は文治五（1189）年、鎌倉の軍勢によって蹂躙され滅亡する。居館が平泉と密接な関係にあったとすれば、宮古湾周辺においても軍事的な緊張感が及んでいたかもしれない。12世紀後半の田鎖車堂前遺跡における居館の防御機能向上は西側に向けられており、湾岸からではなく内陸方面から外敵侵攻を想定していた可能性が考えられる。これが文治五年の前後なのかどうかは断じ得ないが、非常に近い時期であるとみられ、居館の終焉も軌を一にしている可能性がある。これらの論証は今後の課題でもある。

謝辞

本稿を執筆するにあたり以下のみなさまから有益なご教示をいただきました。お名前を記して御礼申し上げます（50音順・敬称略）。入間田宣夫・植月　学・菅野成寛・斉藤利男・趙 哲済・羽柴直人・八重樫忠郎・八木光則

註

⑴入間田宣夫先生のご教示による。

⑵近年、八重樫忠郎氏はこれら陶器片が水沼産以外の可能性もあることを指摘しているが、現時点では確定していない。そのため本稿では報告書発刊時の情報を援用している。

⑶田鎖車堂前遺跡と太平洋航路との関係性については、「奥州と都との物資往来は、これまで日本海ルートを利用したとする見方が有力だったが、（～中略～）太平洋ルートにも目を向ける必要があろう」と、近江俊秀氏も指摘する（近江 2020）。

⑷史実か否かは筆者には判断できないが、文献史料においては1170年の「延久二年北奥合戦」に際し、陸奥守源頼俊が清原氏とともに「閉伊七村山徒」の征討をおこなったとされており（入間田 1997）、閉伊地方の動向について大変示唆に富む。

⑸内耳鉄鍋の年代観については羽柴直人氏のご教示による。

引用および参考文献

岩手県教育委員会　1986「田鎖館（三合並館）」『岩手県文化財調査報告書82集　岩手の城館跡』p.244
（財）岩埋文　2008『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第511集　賽の神Ⅱ遺跡・賽の神遺跡・下大谷地Ⅰ遺跡・八木沢野来遺跡発掘調査報告書』
（公財）岩文振　2011『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第575集　八木沢駒込Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
（公財）岩文振　2014『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第625集　松山館跡発掘調査報告書』
（公財）岩文振　2020『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第718集　田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡発掘調査報告書』
入間田宣夫　1997「延久二年北奥合戦と諸郡の建置」『東北アジア研究』１号　東北大学東北アジア研究センター
入間田宣夫　2005「Ⅲ　天下一の馬産地として」『北日本中世社会史論』吉川弘文館
入間田宣夫編　2008『牧の考古学』　高志書院
植月　学ほか　2020「青森県における古代の馬利用 －林ノ前遺跡出土馬の動物考古学・同位体化学的研究－」『研究紀要第25号』　青森県埋蔵文化財調査センター
植月　学　2021「動物考古学からみた馬匹生産と馬の利用」『馬と古代社会』　八木書店
近江俊秀　2020「太平洋から見た古代日本史」『海から読み解く古代日本史』　朝日新聞出版
趙哲済・福島正和　2021「宮古市田鎖車堂前遺跡の12世紀の居館を巡る堀の構築と埋没の過程　－遺構埋土の岩相層序と堆積状況の観察に基づいて－」『紀要』第40号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
津野仁　2011「小札甲（大鎧）・冑（兜）の編年」『日本古代の武器・武具と軍手』吉川弘文館
羽柴直人　2013「陸前高田市矢作町出土の内耳鉄鍋」『岩手県立博物館研究報告』第30号
福島正和　2021「弓削刀子考」『紀要』第40号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
福島正和　2022a「東北地方北部における平安時代の雑穀利用に関する考古学的研究」『紀要』第41号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
福島正和　2022b「平安時代における三陸沿岸地域の製塩と馬匹生産」『岩手考古学』第33号　岩手考古学会
八重樫忠郎　2012「考古学からみた北の中世の黎明」『北から生まれた中世日本』　高志書院
八重樫忠郎　2019『平泉の考古学』　高志書院
山崎　健ほか　2016『藤原宮跡出土馬の研究　奈良文化財研究所報告書17』　独立行政法人奈良文化財研究所